

夏休み前、学生たちが昼休みに研究室に来ることが多かった。研究室は適度な広さでエアコンが効いていて涼しいのである。

今年もある日、一人の男子学生が昼休みに入ってきた。遠方から来て一人暮らし。用件を聞くと「次の授業の予習をしたい」。日ごろそれほど勉強熱心とは思えない学生

吉田川

だが、実際、テキストとノートを開いて黙々と勉強している。しかし、私にとっては授業の合間、くつろいで過ごせる唯一の時間である。

食べる予定だったカップ麺にお湯を注ぐ。学生は昼食を済ませたかと思っていたが、一応「君、食べたの？」と聞いてみた。「バイト代が入らないので今日はいいんで

13 8/15

⑤ カップ麺の味

す」と言う。あわよくばお昼をこちそうしてもらおうというさもしい計算は彼にはない。空腹を我慢して黙々と勉強する学生を横に、こちらにも食べるわけにいかない。「カップ麺でよかったら一つあるけど食べる？」と聞くと、「え？ いいんですか。いただきませす」。妙な遠慮をされるより、気がいい。

話は変わるが最近、子どもの貧困が叫ばれる。新聞によれば、家庭が「就学援助」を受けている小中学生は1995年度の77万人から2010年度には157万人に倍増。全体を40人学級とすればなんと6人に匹敵する。少子化についてにはよく耳にしていたが、最近の子どもの貧困問題は「いつからこんな事態に陥ったのだろう」と

福山平成大准教授 大深 俊明

首をかしげる。

大学でも空いた時間をアルバイトに費やし、余暇やサークル活動に時間を割けない学生も多い。せっかく志した大学生活での学びを全うしてもらいたい。

その後、大学に献血車が来た。献血する学生、参加を呼び掛ける学生を見ていて、心の中で「君たち一人一人が、日本の未来を背負っているんだぞ」と心の中で呼びかける。

その時、先日カップ麺をあげた学生がやってきた。「先生、今献血したらこのカップ麺もらったので返します」と、「献血ありがとうございますございました」のシールつき塩味ラーメンを手渡してくれた。

早速いただいた。塩味が心なしか、さわやかだった。